岡村　駿（オカムラタカシ、元横浜市企画調整局都市科学研究室）ヒアリングその１

2022 年 3 月 21 日（月）午後 1 時 30 分より 4 時 30 分

なか区民活動センター研修室 2

NPO 法人田村明記念・まちづくり研究会

担当：田口俊夫、青木淳弘、檜槇貢（リモート参加）

田口　始めます。今日どういう趣旨かというと、岡村さんにお聞きしたいのは二つあります。都市科学研究室のお話と開港資料館のお話をお聞きしたいのです。ただ、岡村さんご自身の人生の軌跡を、それをまずお聞きさせていただきたいと思っています。その上で、二つのテーマを深掘りしていきたいというのが、われわれの勝手な希望です。それで、我々とは何なのかというと、私田口と、今いる青木さん、今 Skype ネットがつながらないところの檜槇さんです。その他にもう一人、浅川賢司という人がいます。浅いに川ですね。この 4 名はこの NPO 法人の会員なんです。厳密に言うと、檜槇さんはまだ会員ではないんだけど、実質、会員みたいなもんですね。それでこの 4 名が何やってるかっていうと、企画調整機能を探ろうとしています。企画調整機能とは何だったのかを、この田村明 NPO 法人の中に研究会をつくって、ここ 2 年ぐらい活動しています。もう一つは、この研究会で文科省の科学研究費を取ろうとしていますが、ここ 2 回ほど落選しています。またチャレンジします。それでこの 4 名と、大学の先生が 2 名ほど加わっていただいています。この 4 名は、継続的に月 1～2 回、対面でなかなか会えなかったので、ずっとネットを使って研究の打ち合わせをしてきました。

企画調整機能の研究と、偉そうなこと言ってますが、大変難しいと感じています。何が企画調整だったんだという辺りを、学術的な研究を目指していますので、史実に基づいた科学的な研究というふうに思ってやっています。例えば、田村さんが書いた本には、たくさん企画調整、こうだった、ああだったって書いてあります。それをそっくりそのまま受け取って理解すればそれでいいんでしょうが、我々はアカデミズムの研究者ですから、どちらかというと、それをしっかり科学的に理解したい、実証的に理解したいというふうに思っています。だから当時、どういう人たちがどういうことをやって、どういうプロセスで、どういう成果があったから、それが企画調整だったのかという事実をつかまえていきたいというふうに思ってます。それで、今までもいろんな方にお話聞いてます。内藤惇之さん、西脇敏夫さん、都市研で言えば、中川久美子さん、それとプロジェクト室にいた横山さんとかです。

岡村　悠さん。

田口　そう、横山悠さんです。今、京都にお住まいなんです。

岡村　そうなの。

田口　それと、企画調整に関係する人に、何人も聞いています。今までお聞きしたの、どちらかというと、それぞれのテーマ別なんです。例えば、都市デザイン、高速道路の地下化、何とか。だから、企画調整機能ということでは、皆さん、それぞれの思いはあるんでしょうが、それの機能論というまとまったお話は、まだできてません。1968 年に企画調整室ができてから 1978 年に田村さんが外されたあたりをもってして、実質、企画調整室がなくなったというような捉え方を我々はしています。その 10 年間を、ほぼご覧になってる方というと、岡村さんとか、内藤惇之さんとなります。内藤さんはどちらかというと、ご自分の担当のフィジカルの世界を中心にご覧になっているので、もやもやとした企画調整機能ってなんでしたっけねっていう話になると、何だったかねというお話になっちゃうんですね。皆さんが、それぞれのお気持ちがあるんでしょう。我々の仲間の遠藤包嗣さんなんかも遠藤さんなりの思いがおありになるでしょう。ある意味、歴史的に長く、全体を俯瞰しておられるのは岡村さんじゃないかというふうに、勝手に我々は思ってます。それでこの際、聞いてみたいというのが、今回の目的です。

岡村　田村さんの考えはしっかりしてるよね。現況をどういうふうに変更したいのか。そのために、企画調整機能が必要なんだと。だから企画調整機能っていうのは、どういうもんなんだっていうのは、田村さんの中には六大事業を始め、トータルな姿で持ってたと思うよね。他はてんでんばらばらじゃないかとかね。何よりも自分の仕事が好きで楽しくてたまらないと。だけども、それをやってくには従来の縦割りの中で、部分だけをやっているんじゃ満足できないと。もっとトータルに、同時に、それらが全体のプランにも位置付けられているっていうものをつくり上げていこうとしたのが田村さんの企画調整機能だと思うんだけども、それまで役所の中で、企画調整室なんていうの、なかったから、自分たちはたまたまそこに呼ばれたとしか、みんな、思ってないんじゃないの、たまたま。

田口　一番分かりやすいのが、田村流企画調整なんだろうと思いますね。

岡村　それは持ってると思うわけ、皆さんが。なぜかっていったら、企画調整室っていう部屋の大テーブルで、みんな、ああでもない、こうでもない言いながら仕事してきたわけだし。六大事業も含めてね。それはそれであると思うんだけども、例えば、どうして都市科学研究室なんていうものが、企画調整室の中にできたのかとかね。

田口　文科省の科学研究費を申請するときに、4 人でずっと議論してた中で、企画調整室というのは実は 3 人で構成されてんじゃないかっていう仮説をもちました。実際、そうだと思いますが、田村明さん、鳴海正泰さん、松本得三さん、その 3 人が相互に絡み合って企画調整機能というものが発揮されてたのでないかというふうに思ってます。

岡村　それぞれ部屋、違ったわけよね。田村さんの所の企画調整室。つまり、役所のラインに乗ってる所よね。それが一つ。都市科学研究室っていうのも、別の所にもう一つ、部屋、構えてた。松本さんと私と 2 人でいたわけだよね。もう一つ、鳴海さんは総務局の調査室っていうことで、それぞれがうまい具合に、いわゆる旧来の役所の中で、相手の仕事を引きずり落としてやるとか何とかっていうんじゃなくて、良くしていく。要するに、飛鳥田体制っていうものを意識的に使いながら、自分たちが役所って、こうあるべきなんじゃないの、仕事っていうのは、こうあるべきじゃないのというのをやっていく中で、分野が全然、違うわけだよな。だから、そのとき、そのときの問題をどこが受けるかということによってね。

だけど、一番しっかり受け止めるのは企画調整室だよね。だから、そこが、局の中心になっていったわけだけど。都市研なんか、その必要性や役所との距離感を考えると、現実の行政に口出さないほうがいいんじゃないかっていうのがね。だから、調整なんかしないわけだよね。しないけども、逆に若い人たちだとか、問題持ってる人たちだとか、役所の中だけじゃなくて、外の、特に社会科学系の先生がただとか、多様な市民、もちろん横浜で問題になってる新貨物線の宮崎省吾さんだとか、それから、よその学校の先生、研究者、そういう人たちのたまり場には、なっているわけね。

それを今度、飛鳥田さんもいなくなり、田村さんもいなくなる中で、私は総務局文書課っていうような所に行っちゃうわけだけども、行っても、自分に備えた機能を使って展開していけば、こういう仕事の仕方になるんだというので、実践的な総合行政やっちゃうわけだよね。だから、そこに私が行くことによって、私が最初は 1 人だけども、そのやり方、面白いね、それなら俺も手伝うよと言って仕事を中心としたグループが出来る。そうすると、やり方は調整をしてくっていう、もっと先に、進んじゃうと、こういうことも起こるね。面白かったと、今回の仕事はね。自分は一応、役所の中ではエリートといわれる文書課の法規担当なんだけども、私がやってるようなことをやりたいと思うけど、どうしたらいいかって来たから、君は何ができんのって聞いて、何をしたいのって。そしたら、その人、たまたま、創価大学の出だったもんだから、一般の人と一緒に役所の穴の空いてるところ、たくさん見たから、そういう問題に手を出してみたいんだと言って、横浜の市会議員、7 期も続けた人もいるよね。

田口　職員から議員になった。

岡村　そう。その方が、やっとこの間、辞めたりとかね。だから 30 年近い。

田口　今のお話だけでも重要な点がありました。僕が入ったとき、企画調整局に入ったと思ったら、数カ月で田村さんが政変になっちゃった。それで思ったのは、自分が企画調整機能を具現化してやってみよう、といろいろそれなりに自分でも頑張ったつもりでした。その後、

新本牧に行った際も、そこでも頑張ったつもりです。ただ、大きな企画調整というチームワークというのは出来ていないが、個別のプロジェクトでやることは、それなりにできたとは思います。ただ、田村流の企画調整が継承されていくのが面白いと、思いますね。

岡村　だけども、だんだんとそうはならなくなったわけだよな。

田口　だんだんね。

岡村　普通の組織になって。都市科学研究室だって同じように。

田口　そうですね。

岡村　だから、逆に言うと、松本さんと私がいた 7 年間というときに、都市科学研究室の仕事のやり方っていうのはできたけども、それがそのまま続いたとは思わないわけね。いなくなったらば、全然、そうでない。中川さんなんかは専攻職でずっといたから、同じ領域をずっとやれてると。

田口　だから、中川さんは、ある意味、幸福な人生を送った。

岡村　幸福。幸せ過ぎ。

田口　中川さんは、やりたいことがあって、彼女はずっといたから、それで頑張ってできるようになったんですよね。ただし、大きな意味での企画調整っていうのは関係がない。

岡村　彼女はもともと、そういうんじゃなくて来てるからね。例えば、松本さんなんかも役所に来たときには、自分の席もないわけだよね。都市科学研究室なんていうのは、まだないんだから。

田口　そうですね。

岡村　うろうろしてたのが、田村さんは、岩崎さんからも、せっつかれてたわけだ。ちょうど岩崎さん帰ってきて、田村さんもアーバンデザインっていうのがあってもいいかな。国吉は学校出て、アルバイトみたいな形で作業やって。そういう人たちが何人かいたわけだ。それも一つの時代だと思うわけ。68 年から 70 年にかけてっていうのは、革新自治体っていうのが、あちこちで 100 近く出きてきたり、それから美濃部都知事の誕生だとか、そういう。世の中自体が非常にカオスな状況で、京都など全国の大・中都市から、横浜はどうも面白い

ことやってるらしいから、あそこならいいんじゃないかっていうんで、あっちこっちから来たでしょ、みんな中途で。

田口　その中で、岡村さんが横浜市に入られた年は何年ですか。

岡村　僕は 1970 年。

田口　岩崎駿介さんが入ったのは 1970 年。

岡村　岩崎さんと一緒にいたの、都市研で。ところが、製図板もなければ、何もないしさ。それから命令系統も違うし、都市研じゃ、仕事になんないんで。

田口　ちょっとすいません、1970 年の何月ですか。

岡村　入ったの 4 月。だけど、都市科学研究室ができるのが 10 月。機構はきたんですよ。要するに、議会は通したわけです。人がいないんです。

田口　松本さんがお入りになったのは 1969 年ですね。参与でね。

岡村　暮れ。

田口　暮れです。12 月ぐらいかな。それで都市研、お二人で立ち上げたのが 1970 年ですか。71？

岡村　1970 年に、都市科学研究室っていう部屋と名前はできたのよ。

田口　名前がね。

岡村　要するに、議会、通ったわけだ。機構があるわけでしょ。

田口　そうですよね。

岡村　だから、機構自体はできたわけ。ごちゃごちゃっていって、最初は、岩崎さんたちは、そこ行ってみよう。私も・・・。

田口　岩崎さんも。

岡村　一緒だったの。

田口　都市研に、一応、形式上、籍が。

岡村　籍が。

田口　嘱託で。

岡村　嘱託みたいな形で。私は正規の職員になっちゃったわけ。

田口　そうですよね。すいません、細かいこと聞きます。いいですか、お話をどんどん、腰、折っちゃうようで恐縮ですが、岡村さんは、市に入る前はどちらの大学だったんですか。

岡村　中央大学にいた。

田口　中央の法科？

岡村　法学部政治学科。

田口　中大の政治。

岡村　うん。

田口　それで、出て、すぐ？

岡村　ううん。ずっと遊んでて。遊んでっていうか、自分の生き方が定まらなくて、つまり、話すとむちゃくちゃなんだけども、私は山登りと柔道と、そんなことばっかりやってたわけね。あるとき、大きな山の事故で友達がけがをしちゃって、その治療費等を補給してあげなくなった。それで、なるだけ効率のいいバイトのほうがいいかなと思ってね。友達が、いま都議選挙をやってるから、その面倒、見てくれればと言うので、アルバイトがてら助っ人に行ったわけよ。

田口　選挙の関係？

岡村　そう。そしたら、江田三郎っていう人がいて、彼に会ってさ。話を聞いてるとなかな

か面白いわけだ。そこで、山じゃこれ以上登っていると、俺、死ぬかもしれないと。だから、あなたのやってる仕事、なかなか面白そうだと、江田さんに言ってさ。そして、そういうことやってみたいんだけども、私は勉強も何も全然してないから、どういうふうにしたら、そういう仕事につけるかと言ったら、おまえ、大学はどこだ？って言うから、中央と答えた。じゃあ、この先生の所へ行ってみろ、今、紹介状を書くからって、するすると書いてくれたわけ。そんで、中央の政治学科の横山桂次っていう先生を訪ねることになったわけ。

田口　横山桂次。

岡村　桂次。桂って書くのかな。それから、ツグは、欠っていうのが右。その先生の所へ。そして、私は何も勉強してこなかったけども、これからやりたいと思うと。先生は何を教えてるんだと言ったらば、イギリスの労働運動史を原書で読むって言うから、それは、とても食えないなって。他になんかできないのか。そしたら最近、やったんでは、調査。地域の世論調査だよね。それは、政治学でいうと地方政治の変容を市民から聞いて科学的（統計的）に人々の意見をまとめ、世論として確認していく。そのようなことも最近、始めた。それは面白そうだと思った。

田口　今、言われたように世論を形成する。

岡村　世論形成をしていくということは面白いじゃないですか。だから、それ、先生、やりましょうと。それには、人数が足んないと。例えば調査。その人集めだが、簡単だと。中央なんて、学生数が多いから、研究室に入れないわけ。そのゼミも科目のうちのひとつで、試験受かんないと、入れないわけね。有名な先生の所は五倍だとか十倍だとか。それで、先生の所は地味なテーマで幸い学生に知られてないわけ、先生が。だけど、中央大学自体が政治学科を変えようとしてるときだったんで、いろんな所のそういう新しい手法使ってる先生を集めたときだったのね。そのうちの一人だったんですよ。

　それでいこうっていうんで、だけど地方っていうのは気に入らないな。地方っていうと、対極には中央っていうのがあるからね。早稲田の政治学だったら、どっちかっていうと、ちと中央志向が、強いわけ。もともと私は性格的に、権威とか、そういうの好きじゃなかったから、そこはちょっと。それをもう少し、わかり易く言う言い方ないのかと探したら、ちょうど工業化に入ってるときだから、千葉の京葉工業地帯など、ずっと調べると、結局、これ迄の市町村の枠を超えちゃってるわけだな、行政域を。一つじゃないと、はみ出ちゃって。それでは地域と言った方が良いじゃないですかと、地域政治って言えば。その名前にしましょうよと。ゼミ生を集める原則は、一つ現場重視の視点と、うちは入室試験がない。来る者は全部、採用。嫌だったら辞めりゃあいいというふうにすりゃあ、多くの希望者が来たよ。人がいないと調査ってできないからさ。10 人とか 15 人とかいて、初めて、自前の小さな調

査グループが形成された。

その頃、先生が横浜に住んでたものだから、横浜から、新住市民っていうのかな。ちょうど人口膨張してるときだから、新住市民の意識調査やってくれっていうんで、戸塚と、今でいえば、青葉台かな。しらとり台って昔はいった。そこの住民たちとの比較調査を受けたり。それから、中川さんが行くようになった神之木台っていう。しかし、ここは貧しい人たち、多い所でね。

田口　アパートが多いんですね。

岡村　そう。そこ、やってんのと、もう一つは別に、釧路とか福岡、尼ヶ崎などの選挙調査、仙台の選挙調査とか。そんときには、首長が革新市長会だから、飛鳥田さんの所に頼みに来るわけよ。

田口　今の調査って誰がやりたいんですか。今の調査は誰からお仕事を受ける。

岡村　それは、いろんな組合であったり、横浜だったら役所だよな。選挙じゃなくて、さっき言った、新住市民の意識なんてのは依頼。だから田村さんがあっち行ったり、こっち行ったりって、言ってたでしょ、調査。それと同じこと。今度は尼崎とか、今度はどこどこ。学生はバイト、その間、飯食えるわけだ。なにがしか残って、釧路行ったら、私は戻って、アンケートの回答用紙を電算に入れて集計し、結果の分析をしつつ現地にすぐ持って帰んなきゃいけないから。ゼミの学生たちはそこで解散だけども、行ってる最中は、彼ら調査員が中心。足んないときは、向こうで人を集めて調査。それらの結果をまとめて、クライアントに報告して、こことここと、こういう問題に気を付けてやれば、これくらいの票で上がるんじゃないですかとか。それを、個人の名前じゃできないから、中央大学横山研究室、政治意識調査という形で、横山さんの研究室を事務所代わりにして、2年ぐらいやったかな。

そうすると、横浜でも、神奈川新聞が参議院選挙の調査を初めてやるとか、そういう変わり目のときだったんですよね。だから、まだそんな作業を受けるところがあまりなかったの。今じゃ、どこでもやってる、そういうことやるやつが。こっちは山に登ったりなんかしたから、人の集め方、使い方、配置の仕方と集約の仕方。生活の知恵だよな。それは持ってたわけ。そういうのを使って、実際に争点となっている問題をさぐり、現実に話を聞かなければ、いくら難しい本、読んでも、ほとんどの学生は4年終わったら、全然、普通の会社に行くわけじゃない。私には、それがどうも分かんなくてさ。学校もあんまり好きじゃなかったから行かなかったけども、そのゼミのほうだけは楽しく真剣にやった。一番仲良かったのが三里塚闘争の指揮した島寛征。彼なんかも一緒に、その調査やって、自分の地元に戻って実践した。

田口　島、何ていうんでした？

岡村　島寛征。カンセイっていうのはデザイナーの寛斎の寛。セイっていうのは、ぎょうにんべんに正しい。それやったり、それから、いろんな人に知り合っていくわけだよね。それで、その勉強の延長が、全電通の本部の中に、平和経済計画会議っていうのがあるんだけども。

田口　平和なんですか。

岡村　平和経済計画会議っていうのがあるんだけども。高橋正雄さんなんかが理事長やってた所ですよ、経済学のね。まだ若いときで。月に1回ずつ、私の勉強、ちゃんとやったかとか見てくれて、その代わり、向こうが昼飯を食わすというような所。だから、えらく自由だったわけね。飛鳥田さんが、選挙が近付くと、その土地の革新市長が「調査」をやってくれとあっちこっちから来て面倒くさいと。もう、うちで部屋つくるから、こっちでやってくれと。

田口　市の中に？

岡村　そう。要するに、横浜市の中に研究室、つくっちゃえばいいじゃないかと。

田口　そこで、そういう。

岡村　だから、科学的な調査で行政を研究する都市科学。

田口　地域政治からの。

岡村　その話もあるし、田村さんのほうからは岩崎さんのアーバンデザイン。そんときまでないんだから、アーバンデザインっていう発想がさ。ていうのも上がってきただろうし。そういうの、ぐしゅっと集めて、一緒に進める。ところが一緒にはならないわけだよね。先行して、鳴海さんは来てたから。鳴海さんは、鳴海さんの所に、職員、ちゃんと課長も係長も。そういう人たちを含めて、組織として既にあったわけ。

田口　総務局に。

岡村　総務局にね。だけど、飛鳥田さんの力が一番強くなった2期目になったときに、それまでも少し、いろいろ市とか、そんなの、私も手伝ってみようかっていう話が上がってきて、

つくったのが都市科学研究室。都市科学研究室が設立された当初は、2 人になるわけだよ。松本さんと私とで。あと 1 人、役所の係長さんが事務をやるために。

田口　もう一人いたんですか。

岡村　その人は、全く事務っていうのかな。春田さんっていってね。

田口　春田さんね、名前あります。

岡村　おとなしい方で、京都大学かな。松本さんが京都大学だから、京大の人がいいだろうって。全く、役所の考えはそんな程度なんだよな。おとなしい人だったよね。だから、3 人。正規には、事務の春田さんと岡村。松本さんが参与で、室長さんという形になったわけ。

田口　そもそも松本さんが参与でお入りになったときと、都市研をつくるということとは、別の話なんですか。

岡村　だから、岡田さんっていう朝日の政治部長がいて、その方が神中で一緒だったんだよ、飛鳥田さんと。松本得三っていう大阪の記者がいるけども、とても面白いし、ちょうど本人もそういうことをやりたいと思ってるらしいから、一度、会ってみたらどうかというようなところから始まりなんだ。

田口　そういうことをしたんだ。

岡村　そして、参与だけど、何の参与だっていうのね。都市科学っていうのが田村さんとの妥協だろうな。松本さんなんかに言わせりゃあ、市民生活調査室でよかったわけよ、こっちはね。そのほうが、むしろ飛鳥田さんの意図。だけども、そこでハードな問題も一緒くたにやろうと思ったんだと思うんだよな。一緒くたにやるんじゃなくて、それは、企画調整局で、その 2 年前につくっちゃってるから、できない。できないけども、そのごたごたの人間たちは都市科学研究室の方に入れちゃえば、ハードの人間もソフトの人間もっていうふうに、正規軍とは違った、混成旅団みたいな組織。

田口　国吉さんも、形式上、都市研にいたことになる。

岡村　バイトでしょう、当時の彼は。

田口　そう、同じですよ。だから一応、形式上、お二人ともバイトだったんだけど。

岡村　ところが、バイトでやる仕事がないわけだよ、いても。その上で松本さんは、どうぞ、ご自由におやりくださいって言ってるだけだから。そうすると、岩崎さんも困っちゃって、ここでは仕事ができないって言うんで、企画調整室。企画調整室のほうに、まず先にアーバンデザインの担当セクションを、つくったわけだよね。そうしないと仕事になんないと。

田口　担当として、一応、形式上、国吉さんの言ってる歴史によると、1971 年、だから、国吉さんが職員になった年かな。

岡村　それは、そうした部屋ができれば、選考職で職員が採れるわけ。選考職ってあるでしょ。それで試験なしで。

田口　部屋があると、選考。

（注：地方公務員法第 17 条の 2（採用の方法）「人事委員会を置く地方公共団体においては、職員の採用は、競争試験によるものとする。ただし、人事委員会規則で定める場合には、選考（競争試験以外の能力の実証に基づく試験をいう。以下同じ。）によることを妨げない」とある。競争試験は、特定の職に就けるため、不特定多数のものの競争によって選抜を行うもので、あるいは、受験者の有する職務遂行能力を、競争関係において相対的に判断するための試験である。選考は、特定の者が特定の職に就く的確性を有するかどうかを確認する試験である。）

岡村　違う。部屋っていうんじゃなくて、正式に組織ができれば、そこに選考職っていう形で試験なしで。その代わり、他の部署には動けませんよと。中川さんも、それで動かないで済んだわけだな。

田口　翻訳職ですよね。組織があると、そこに行って・・・。

岡村　だから、お二人はアーバンデザイン担当の職員として、選考職で採った。

岡村　その辺が役所の人だと分かんないわけだよな。

田口　分かるんですけど。

岡村　それで、もっと難しい問題があるわけ。岩崎さん、35 でしょ。彼もしっかりしたやつだからさ、こんな待遇で、いつまでもね。でも、たまたま田村さんが部長だったから、せ

めて課長ぐらいって言って、まだ横浜市役所で、35 ぐらいで課長なんていう人はいないわけよ。

田口　ないですね。

岡村　鳴海さんが入るときも、もめたわけだ。三十幾つで心得っていうの付けてさ。

田口　鳴海さん、心得、付いてたんだ。

岡村　心得が付いてたんだけど、上だけ言ってたわけ。

田口　課長補佐みたいなもので。

岡村　そう。その頃は補佐っていうのがなかったから、心得っていうのが付くわけ。

田口　言い忘れる・・・時たま心得の部分を。

岡村　言い忘れてるわけだよ、本人は。

田口　岩崎さん、主査になりましたね。

岡村　主査だった？

田口　まず、係長。

岡村　まずね。それで、要するに幹をつくって、そこの係長の所に、お手伝いみたいに 1 人、専攻職。それで国吉君は入れちゃったわけだよな。彼は押しかけ人みたいなもんなんだよ。

田口　少し知ってます。

岡村　それで、そこで一応。係長だけじゃ、各局に形つかないじゃない。それでアーバンデザイン室っていうのか。

田口　担当です。

岡村　担当っていうことで、一応、課相当にした。

田口　岩崎、国吉さんね。

岡村　そう。それで、今度は自分たちの仕事の仕方を見せなきゃいけないわけよね。何をどんな具合にやるんだっていうことを。そこで初めて、実践的な行政に手を出せるわけじゃないですか。

田口　こんなことやったら、こんなことできるんだと。

岡村　こういうことをやるんですよと言って。そうすると、そういう仕事の進め方が必要なところはあるわな。その中で、また次の手法を切り開いていくというね。だから、黙ってて仕事が落っこってくるわけじゃないんだよね。

田口　その時点をもってして、その後の都市研と都市デザインになる。

岡村　分かれたわけ。要するに、ハードなことは田村さんが調整。岩崎さんが田村さんの下でっていうことにね。あと、その他っていうのは都市研のほうに来て政治的な問題なども残された。それは私の場合、他都市の調査など二重の役割を持ってたから。要するに、選挙に行くときは1カ月ぐらい、行かなきゃいけなかった。飛鳥田さんに呼ばれて、しばらく役所に来ないで、良いからと言うので、首ですかって聞いたら、首じゃない。給料日は来てもらわないと困るんだけど、あとは仙台のほうに行って、1カ月ぐらい手伝って来て欲しい。

田口　そちらのお手伝いに行ってと。

岡村　そこへ行って、その調査を今度は打つわけだ。調査を打って、政策等を考えまとめたら、飛鳥田市長にそれを持たせて、革新市長会会長として向こうで応援するということになるわけね。調査は現地でやって、全市の動向をこっちは押さえておかないとしょうがないわけだからさ。だからそれは公費で組めるわけじゃない。

田口　すいません。今のところ、よく分からなかったのですが。

岡村　横浜で都市科学研究室っていったら、都市科学研究室は事務分掌を作んなきゃいけないわけじゃない。事務分掌を作るためには、仕事が具体的でなければ困るわけじゃない。その仕事は何かっていったら、年2回の全市調査と、それからあと、各種の研究会を立ち上げる。それから、特にやらなきゃいけないような突発的な問題が出てきたときのプロジェクトっていうのを組むっていう。

田口　調査季報も入ってるんでしょ。

岡村　調査季報も四半期ごとに、それらの活動の成果として。

田口　あとは、市民意識調査をやっている。

岡村　そういうのをずっと。

田口　こういうの、ちゃんとお仕事あります。

岡村　今まで総務局でやってた編集業務を、すっぽり、何号からは都市科学研究室。仕事上は、それとあと、4年に1回ぐらいずつ、4年に1回とは書いてないけど。

田口　白書ですね。

岡村　生活白書。要するに、毎年、調査をやるっていうのは生活白書を作るから。

田口　そのためにね。

岡村　そのためにやるんだと。だから、全く、あとは何をやれっていう指示はないわけよね。

田口　あそこには書いてないけど、いろんな所に行って、さっき言ってたお手伝いをやってくるのが本当は一番重要なわけですね。

岡村　遊びだから、そっちのほうはね。遊びは遊びだけども、例えば、こういうのもあるよ。全国革新市長会の全国集会のなんていうのは、横浜市の市民局広聴課が所属自治体に声掛けて、やってたわけで。広聴会議っていうのを開いて、その後、終わったときに、革新市長会議っていうのをやるわけだから。あれと同じだよ。

田口　自治体学会と。

岡村　自治体学会と同じ。

田口　分かりました。みんな、そうやって、公の政治目的や行事があるから来て、ついでに他の催しもある。本当は、こっちが主体なんだけど。

岡村　そんな形で。

田口　でも、革新市長会の実質的な番頭さんっていうのは、鳴海さんがやってたんでしょ。

岡村　もちろん。

田口　鳴海さんが熱心にやってたというわけではないのですか。

岡村　やってましたよ。やってたけども、やってて、まだ彼がやってるって見られちゃまずいから、地方自治センターという革新市長会の事務局をつくった。

田口　ちゃんと、事務局は事務局としてありますよと。

岡村　そこがやってますよと。

田口　そもそも、すいません。また最初に戻っちゃいます。お生まれは何年なんですか。

岡村　生まれ？　来るだろうと思ってね。これ、あげるよ。あげるよっていうの、おかしいんだけどね。生まれは東京。

田口　1947 年ぐらいですか。

岡村　生まれは、1944 年だ。

田口　44 年。終戦前か。東京のどこで生まれたんですか。

岡村　神田の駿河台なんだ。

田口　中央大学がある所ですね。

岡村　だから、うっかり行っちゃったんだよね。

田口　あそこら辺って。

岡村　ハマダ何とか病院っていうのがあって、そこの産院で生まれたらしいよ。

田口　坂の上はそういう建物ばっかりだろうし、坂の下はあるんですか。

岡村　どこだか知らない。あとは2年ごとぐらいに住み替わって、小学校から世田谷。市役所、入って、最初、まだ都市科学研究室ができてないから、どうしてたかというと、一番、役所の仕事が見える所はどこかって聞いたら、それは相談室でしょうねって言うんで、市民相談室にいった。

田口　市民相談室。

岡村　半年いたんだよ、9月迄。都市研が10月にできるまで。そこで、いろんな局の仕事が見れるっていうから、多数の現場を廻った。それから10月に都市科学研究室が設立されて、7年間、都市科学研究室にいたのかな。52年、飛鳥田さんが出ちゃって。

田口　昭和ね。

岡村　そう。危なくってというより、都市研にいりゃあ、後ろ指をさされるからって言うんで。どこか他の職場に移った方がいいって、人事課って言ったら、ふざけんじゃねえやって、おまえみたいな職員に来られて、たまるかって。では、次に文書課って答えたの、役所らしい所じゃない。自分だって、役人やろうと思えばそれなりにできるだろうと思って、そこへ行ったのよ。行ったらば、ろくでもない所だな。ちゃんとした仕事くれないわけよ。危険人物としてマークされてたんだろうね。

田口　それは昭和52年？

岡村　52年。それで、どういうことになったかって言ったら、タイプ室とか印刷室だとか、そういうのがあるでしょ。

田口　タイプ室。

岡村　タイプ室、印刷室、集配室とかさ。

田口　ある。

岡村　それら全体の管理。それから、あの頃はまだ、ゼロックスも 1 枚、幾らで各局に請求。それまでは、青焼きとかいうのを手でやってたんだよね。その振替、お金の。各局が、

今月、幾ら、ゼロックス使って。それをゼロックスの借り上げ使用代に相当するように分配してさ。つまり、あまり創造的な仕事じゃないわけだよな。あと、もう一つくれたのが公印の管理。

田口　公印ね。

岡村　公印押すのには、文書を照合して、こっちがはんこ押さないと。

田口　ありましたね。

岡村　それなんだよ。こいつら、私をいじめにきてるなと思ってね。それが始まりで、よくよく事務分掌を見たら、彼らがあまり手を付けてない仕事で、まだ開港資料館とはいわなかったな、何とか近代史記念館の建設というのがあった。ちょうど昭和の 10 年頃までの第 1 次市史編纂が終わったんだな。その間の資料の保存も含めて、昭和期の市史編纂に移る前に公開用の施設をつくるという計画。

田口　あれ、文書課でやってるんですか。

岡村　文書課。市史編集室っていうの、文書課が持ってる。公文書管理が入るからね。

田口　公文書ですよね。

岡村　文書課っていうのは、今、言った雑然としたタイプ室だ何とかっていうのは文書係っていう所が。それから法規係っていうのがあって、これは条例や規則の作成で法令審査をかけるところ。もう一つは、その頃はまだ機構担当といって、組織だな。これは、後で人事課に分かれたけどね。私はこの機構担当に行くことになっていたが、行ってみたら他の職員が座ってんだよ。直前に、ちょっと変えたみたいですよ、なんて言われてさ。私は、どこって言ったら、こちらですって言われて。それで、ハンコの当番させられたからさ。ここは、徹底的に戦うところと思ったわけ。文書課っていう所は、いろいろ由緒ある所だそうで、来たらまず、お茶入れからやってもらいますって言うんだ。すいません、私は、コーヒーの方が好きなんですけどって言ってさ。お茶はまず、飲まないから、その当番とやら外して貰いますって、自分の茶碗を床に落っことして、割ってさ。やんなかったんだよ、お茶当番は。次の日に、ドリップのコーヒー持ってきてさ、それを入れると庁舎の 2 階からずっと一帯、コーヒーの匂いになっちゃうわけだよな。そんなことやったら、向こうが音を上げちゃってさ。これは駄目だと、一筋縄じゃいかねえっていうんだ。だけど、こっちは焦らなかったからね。

結構、楽しんでいるうちに所払いで、先程の近代史云々の仕事を担当することになった。

その段階で田村さんに挨拶し、開港資料館建設の要点を聞いた。その市史の連中たちが、うんと言われないと、それまでの資料や収集の方法などのソフト面を、どういうふうにやってくかっていうことは分からないじゃない。その後まず、野毛の図書館にあった市史編集室に行って、業務を担当していた東海林さんと石井光太郎さんに会った。こういうこと考えてんだと。要するに、開港資料館っていうのをつくろうと思う。それには一つ、条件が。あんたがた、これから役所の市庁や関内の街とか全国に出なきゃいけない。草履履きとポロシャツと、そういうの、スタイルから普通の格好ができるようにならなきゃいけない、それだったら買いたい資料、必要ならいくらでも買い求めることができる。それならやるっていうことになった。そっから始まり。

田口　総務部の文書課に移る前に、既に開港資料館の話は企画調整局の中で。

岡村　してない。都市研では、局の会議にあまり出席していなかったので。

田口　全然ですか。

岡村　全然、知らなかった。だって、田村さんを、私たちの仕事には殆ど触ってないもん、系列からいうと。さっきあなたが、松本、田村って言ってたでしょ。松本さんは人事のことなんてしないでしょ。その心配したのは、鳴海さんが言ってきたわけ。

田口　鳴海さんが。

岡村　そう。鳴海さんのほうが心配して、総務局で良いのかって、文書課でいいなら話をすると言うから、いいですよって。

田口　なるほどね。

岡村　そういうことだった。

田口　鳴海さんとは、当然、接点があったんですよね。

岡村　そう。ただ向こうもよく、こっちのことも知ってるわけだ。だから仕事には介入しないわけよ。こっちも口出さないし、向こうもね。変なバッティングはしない。つまり、都市問題を調査研究する団体は、その頃は三つ位しかなかったですよ、まだ。東京都政調査会っていうのが鳴海さんの出身母体。そっから横浜に来た。

田口　そうですね。

岡村　これは都労連が出資して小森武っていう人がつくった。三島の『宴のあと』に書かれたあれです。それからもう一つは、東京市政調査会、後藤新平が。これは財団として担保が付いた、あそこの建物を貸して、そのお金で。

田口　安田財閥のね。

岡村　そう。それと新しく出来た都市科学研究室。

田口　三つですか。

岡村　三つしかなかった、この種のものは。私が学生で、研究室でやれたのが新しい試みで、市政調査会っていうのは長いからね。これは昔からあったけども、古い、がちがちのもの。都政調査会は研究員が数 3 人ぐらいしかいなくて、美濃部都政の運営で精いっぱいになっちゃった。そんなこともあって、私の所にいろいろな調査の仕事が来た。社会党の地方政治局なんかも何本か持ってきて。それぞれが自分の所へ職員として来ると思ってたんだな、私が。

田口　岡村さんが？

岡村　そう。要するに、みんな来ると思ってるけども、私は東京で生まれてるから、朝、みんな通勤でドアにへばり付き東京へ行くのは嫌だけど、と思った。逆横浜方向に行くのはすいてんだよな。だけど、みんな言うわけだ。横浜みたいな泥くさい所へ行くなと。飛鳥田には鳴海一人でたくさんだと言ってたのね。だけど、そんなことよりも横浜の空は広かった、東京よりもね。それから、いかがわしいところが面白そうだっていうのが。さらに、もう一つは、東京は大き過ぎるっていうの、あるね。横浜だと、一応、特徴的なエリアがあるし。それから、既に新しい手法で市政をやってるし。あの市長、面白そうだというので。それで、横浜の都市科学研究室づくりをやろうかということで、来たのね。

田口　すいません。入ったときには、都市研をつくるっていうの、知ってたんですか。

岡村　横山先生から直接話を聞いて知ってた。だってその前に横浜から、ものすごい大きな調査、7500 っていう調査を受けてたんだよ、サンプル数。選挙があるんで、その前に横浜の区ごとのデータが欲しいんだと。それで判断をしたいというのが飛鳥田さんのオーダーだったの。そうすると、瀬谷が一番ちっちゃかった当時。一番ちっちゃくて、400 ぐらい、

最低、要るわけよな、サンプル数が。そうすると、瀬谷区を 400 にすると、もっと大きい所。全部、積算すると 7500 サンプルになっちゃうから、キチガイみたいなもんじゃないの 7500 サンプルなんて、どうすんのと。全市で 1500 も採れば、十分、それで分かっちゃう。そうじゃなくて、区ごとに政治地図みたいなのできないかと。ここではこういう問題があり、これがこうなってるって、票がここ何年間、共産党と自民党とで、こう分かれてると。それで、市会選挙と、それから市長選挙と、全然、違うわけだからね。それを先にやってたんですよ。だから、それが終わり切れないで、市役所に持ち込んだわけさ。それが相談室に来て、最初は役所の仕事を現場で見たけども、3 カ月かけて都市研づくりをするための前に整理しなきゃいけない。松本さんも白書、『横浜と私』っていうのを抱えていた。

お互いに 70 年までに、それを終わらせちゃって、71 年の正月から、さて、どうしようかと。都市研の道行きを、これから。飛鳥田さんは、何やってくれてもいいんですよと。すると、意外と現実的な性格だった松本さんは。白いカンバスを与えられたと思って、できるところからやれるところからやっていって、それで道をつくりましょうと。だけど、絶対、忘れちゃいけないのは、現場で物を考えるという特典を研究の核とすると。それから、市役所は、どこまで市民の立場に立って、市民の問題を考えられるかと。それを共通テーマにしようと。それなら広く合意できるじゃないかっていうことで。そういう視点から、季報の編集だとか、調査の質問づくりなどの作業をまとめたりしていった。

田口　非常に細かいこと聞いて恐縮なんですけど、市役所に入るときって、一応、形式上は試験、受けたんですか。

岡村　試験、受けたよ。というのは学生にやられた。だって、こっちは 25 だか、大学を出て横山先生の研究室を事務所がわりに調査屋をやってたからね。その 7500 の調査、大変だったわけだよ。14 区あったから。1 人が責任者になって、そして、自治労の組合員を調査員に使って、必要な回収率をまとめるために 1 カ月ぐらいかかったね。そんな苦労しても、学生の責任者が現場で、調査員の役所の職員の組合員に、おまえたちはまだ学生じゃねえかと言って、からまれるんだな。それでこっちは、ちゃんと調査員がお宅に行ってきたかどうか調査する質問があって分かるんですよ。実際には行ってないって。そこんところを、チェックして引っかかった人には、もう一遍、行ってきたほうがいいんじゃないですかって。それでも言うこと聞かないと、お互いに相手をなじり合う。そうこうすると、殴られたりなんかした学生などもいたわけさ。その恨み、返してくれるんでしょうねって、調査が終わってから、責任者だった学生たちから言われてさ。願書出しときましたから受けてくださいと言われて受けた。たくさん採るときだったから、一応、試験も受かったのよ。

田口　一応。書いたんですか。

岡村　書いたと思うな。よく分かんない。だから、事務吏員で専攻職じゃなかったんだ。

田口　分かりました。ありがとうございます。確認なんですけど、もう一つ。都市研をつくるときに、田村さんは関与してないんですか。

岡村　それは例の本があったろ。「目にうつるものがあまりにも美しいから」あれの中に入江さんが書いているけども、田村さんやなんかが松本さんを紹介したっていうことは確かなんだよ、入江さんが。入江さんが調査課長だから。

田口　調整課長。

岡村　彼が鳴海さんと田村さんに呼ばれて、お二人から、今度、こういう人を呼びたいから、役所の中に、都市研みたいなの、つくりたいので、準備を進めてってって言われてるから。田村さんも松本さんが来るっていうことは分かってた。会ってもいたかもしれない。松本さんは、私の入庁が 70 年の 4 月だったけども、その前の年の 12 月に来てるはずなんだ。まだ、都市研は出来ていないから、そのときは技監室にいた。

田口　誰が？

岡村　松本さんは。

田口　参与で？

岡村　参与で。それで議会を通して、それこそ、機構担当の所、入江さんが事務分掌を作って、それを機構担当が、定数査定をやって、それから議会上程するじゃん。それで OK になればっていうのが普通の人事じゃないですか。それが 10 月 1 日だったんだよ。

田口　そういう流れがあったわけですね、当然ね。

岡村　つくるっていうことはあったけども、イメージがね。

田口　すいません、ちょっと聞きます。田村さんにとっての都市科学研究室に対するイメージって、お聞きになったことありますか。

岡村　どういうふうに言ったらいいかな。違ってたでしょ、きっと。自分だったら、こうするっていう考え持ってたでしょ。つまり、岩崎さん使って。それでソフトのほうは、総務局

の調査室を広げりゃいいだけの話でしょ。

田口　すいません。でも企画調整室は 1968 年 4 月 5 日に出来たのですけど。そのときには、総務局調査室っていうのは解体してないんですか。

岡村　解体してないよ、ずっとあるよ。終わってからだって、ずっと続いてたじゃない。

田口　それは、僕の全くの認識不足。（田口注：昭和 43 年 9 月 15 日現在の『横浜市職員録』によると、総務局に調査室は存在しない。鳴海正泰は企画調整室企画調整部に属し、総務局主幹兼務となっている。鳴海の肩書から総務局の兼務がとれるのは、昭和 50 年 1 月 1 日現在の職員録からである。ただし不思議なことは、総務局行政部文書課が昭和 53 年 3 月に刊行した『横浜市機構沿革史』で、総務局調査室が昭和 45 年 4 月 1 日現在でやっと消滅している。つまり昭和 44 年 4 月 1 日現在、昭和 44 年度まで「機構上」調査室は存続していたことになる。岡村氏が言うように、議会筋の鳴海に対する「鳴海が属するなら企画調整室の新設は認めない」という反発が下火になる二ヵ年を待ったともいえる。）

岡村　普通だったら、なくなるでしょ、調査室っていうのが。そうじゃないわけ。それがそのまま残ってるの。今度、逆にそれが議会関係の中で、鳴海がいくんだったら、新しく提示される企画調整という機構、認めないよっていうのが議会筋の動向だったんだ。

田口　でも、鳴海さんって、形式上は企画調整室の主幹じゃないんですか。

岡村　そう。

田口　兼務で調査室か。

岡村　調査室。企画調整室じゃないだろ。専任主幹は総務局の所属では。

田口　専任主幹はあれですけど、主幹ですよ、最初。

岡村　最初、主幹じゃないでしょ。

田口　職員録には、主幹で載ってます。

岡村　最初？

田口　うん。ただし、兼務かもしれない。

岡村　心得って書いてなかった？

田口　心得は書いてないね。

岡村　心得は書いてない？

田口　うん。昔の職員録、全部、当たって。だから僕はてっきり、同時に総務局調査室がなくなったのかと思ってた。

岡村　だって調査季報、まだ持ってたんだ。

田口　持ってたけど。

岡村　持ってたっていうことはあったわけでしょ。

田口　季報は持ってて、その空白期。都市研ができるまでの 1 年、2 年の空白期は、企画調整室調整課でやってたというふうに、私は解釈してた。

岡村　違う。向こうでやってたの。総務局のほうで。

田口　なるほどね。そうすると鳴海さんは、ずっと組織として残ってる総務局調査室は、まさに企画調整室が華やかな局になったりしたときは、専任主幹でいますけど、総務局にはどうしたんですか。

岡村　どういうふうになってたのかね。分かんないけども。鳴海部屋みたいのがあったんだよ。そこにも職員が付いて。

田口　よくいわれてますよね。市長室の反対側の所に。

岡村　でも、総務局っていわなくてもいいんだよな。企画調整室の分室みたいなふうに考え。そうかもしれないな。あそこの職員さん、企画だったからな。総務局じゃないから。

田口　皆川さんとか何とかさんとか、みんな一応、企画調整室の職員録には載ってるんです。

岡村　そうだ。あなたのほうが正しい。だけども、別部屋で。

田口　形式上、総務局調査室が何やってたかは知らないけども、ずっと残ってるっていうことですね。

岡村　そう。だから施策とか、そういうのもやったりしたじゃん。アジアの卓球大会とかさ。

田口　あれは総務局がやったんですか。

岡村　総務局っていうか、鳴海さんの所が中心になってさ。

田口　もう一回、戻ります。そうすると、田村さんのイメージっていうのは、どちらかというと、岩崎さんが属する都市科学研究室で、岩崎バージョンになってたかもしれないということですね。

岡村　岩崎バージョンになるでしょ、当然。逆に言うと、こっちは触んなかったわけだから。

田口　もう一つのところ、私の全くの思い入れでそうなっちゃったのかもしんないんだけど、田村さんは、都市づくりにおいて、社会調査をベースにした科学的なアプローチというのを重要視してたから、都市科学研究室というものを立ち上げたいと思ってました。

岡村　そうだと思うよ。

田口　いいんですか、この理解で。

岡村　名前はね。

田口　名前は。

岡村　だけども、現実に松本得三っていう個性がそういうふうになってないわけだよね。街をつくりに来てるつもりないから。

田口　松本さんはね。

岡村　松本さんはね。それよりも、一人一人の人間が、市民がどうなってるかっていうところを探りたいと。それから、役所の中の病理現象を見たいっていうことがあって。

田口　それを言っちゃうと、松本さん自身は、いろいろなことを調べて、知って、分かって、さてその後、どうするんですか。

岡村　だから、結局、相模原に出らされたじゃん、市長選に。

田口　あれも不本意だったんでしょ。

岡村　そうよ。不本意だって行く場所があるじゃないかと。何も相模原、行かなくたって、鎌倉でもいいし、そういうんなら分かるけども。私は、だから反対だ。鳴海は私に、この間暫く松本さんに触れないでくれと。要するに、私が反対しちゃうと、松本さん、ずっと横浜にいちゃうから、相模原断られちゃうからって言うんでさ。

田口　極めて重要なポイントなんですよね。松本さんは、仮の話ですけど、飛鳥田さんがずっといたとすれば、ずっと都市科学研究室も松本スタイルでやってたんですかね。

岡村　ある程度まで自分で納得できれば、辞めたでしょ、辞めるでしょ。次の人に渡しても、別にどうってことないでしょ。

田口　というのが、もう一回確認しようと思ったの、松本さんと岡村さんで始めた都市研というものが、さっき二つの柱をお立てになったと言うけれども、それはどこまで何をやろうと思ってたんですか。

岡村　それは、だけど分からないもん、簡単に。

田口　分かんない。

岡村　それは分かんないっていうのは、その問題がずっと、役所の官僚制から何からを支えてきてるわけだから。どっから出てくるんだと、そういう病理現象がさ。病理現象っていうのは、まとめて治るもんじゃないもんな。だけど、もっと突き詰めたいっていうのはあったでしょうね。それが、飛鳥田さんの言っている表の論理だよね。市民参加って言うけども、本当ですかというのをずっと見つめ、考えてた。結局、彼がまとめたのは、情報公開と市民参加と知る権利、この三つがきちっと固まってこないことには、まだまだ役所にごまかされちゃいますねと、市民のほうが。それに徹底的に対抗したのが、横浜新貨物線の反対運動だった。都市の中の運動としては、あれは優れてますよ。農民運動としては三里塚があり、それから、もうひとつは熊本の水俣病闘争。三つの住民運動だよね。そういうところ、いけた

んだから。三里塚のほうは、さっき言ったように一緒のゼミ仲間が地元にいる。それから新貨物線は横浜が現地だから、そういう意味では、公害問題に対応した助川さんなんていうのも面白いキャラクター。

田口　助川信彦さん。

岡村　うん。公害センターの公害対策局長。その後、都市研を出た私は、2 年ごとぐらいに職場が変わっちゃうわけだよな。

田口　文書課に移って？

岡村　文書課は、だから開港資料館つくって。それで今度、過去と現在、都市研で現在の横浜を見て、ここの資料館で過去の横浜見てるのはおまえだけだからって、高齢化への課題調査や市政 100 周年のプランだとか、そんなとで、ずっと、あちこち変わったね。

檜槇　いいですか。どんどん発展しそうなんで、これまでの話の中で二つ、三つ、お尋ねしたいと思いましたので、よろしいですか。

岡村　どうぞ。

檜槇　開港資料館に入ってしまうと、また長くなるかなと思ったもんですから、すいません。一つは研究所のことなんですけど、先ほど言われた都政調査会とか、東京市政調査会、それから都市科学研究室。岡村さんが 1970 年 4 月に市のほうに入られて、こういう状況のときに、自治労が 1973 年だったと思いますが、10 月ですけども、地方自治総合研究所っていうものをつくってるんですよね。そのときに、横山桂次先生が一枚、絡まられておられて、去年、亡くなったのが・・・。

岡村　辻山幸宜ですね。

檜槇　辻山さん？

岡村　はい。名前が。

檜槇　ツジヤマさんが 1973 年に自治労の準備室という所へ入ったことを、この間、お葬式のリモートで聞いたんですね。あの辺りの研究所を、実はその時期に地方自治関係の財団法人などができていってるんですよね。その辺の革新自治体の影響が、少しまだ残ってたんだ

と思いますが、そのときに、多くは自治省とか自治労とかという、あるいは革新自治体の都市科学研究室とか、みんな狙いは何だったのかなっていうのが、あらためて岡村さん、お感じになってた狙いを一つ、お聞かせ願いたいっていうのがあります。

それから二つ目、青木さんがそこにいますけども、世論調査とか、私の知ってる限りでいうと、要するに、アンケートの調査とか、そういったものっていうのは、社会学の先生たちが頑張って、学説関係やってたような気がするんですが、政治学でおやりになった、すごく、さっきの横浜市全市 7500 サンプルという膨大な調査をされてたっていうのも。その辺は、前後の政治学とか、そういう世論調査についての実態がどうだったのかなというのを聞きたいと思います。

あと一つだけ、3 問です。松本得三さんの志向性ですよね。私も現場主義と市役所の病理のえぐり出しみたいな、すごく、今もとても大事な論点だと思うんですが、特に行政の病理、いわゆる官僚の病理みたいなのを意識されてたがために、都市科学研究室は市役所の中におつくりになったし、それから多くの、今もそうですが、シンクタンクというのが、恐らく、市役所といいますか、行政の病理。結局、人事で、全部、動かしていくみたいな、そんなのに対するアンチテーゼを出すといったところだったんじゃないかっていうふうに今も思ってるわけですが。その三つですよね。きょうの岡村さんへのインタビューは、シンクタンクっていいますか、なぜシンクタンクができて、ある面で並走しながら、私の見方からすると、うまくいかない。私も佐世保市役所の中にできた政策推進センターというもののセンター長やらせてもらいましたが、とても元気がなくなっていくんですよね。そういう自分の中の役所の面白さがどんどんなくなっていった自分の体験からいって、きょうのテーマ、ともかくとしては、そんなことを聞かせていただいたら、うれしいなと思います。すいません、途中で話を切ってしまいました。

檜槇　最初はあれです。横山桂次先生、中央大学の法学部の先生だったし、恐らく先生、岡村さんも、ご指導、受けられたと思って。その方がどうも発信源のような気がしてならないんですよね、ここまでのですね。当時の、例えば自治労のリーダーは、タカハシマコトとか、それから、カトウヨシタロウとか、今やこの世にいませんけれども、ある種の革新自治体を応援しながら、かつ、実務的な観点をよく知っておられる先生たちがおられて、その中の一人に、横山桂次さんもおられたんだというふうに思っていたもんですから。門下生の岡村さんのお話を、今、聞かされてると思って、その辺りの若かりし頃、20 代の半ばぐらいの頃のところで、もう少し、その辺の話が聞こえたらなと思って、1 番目のこと。

岡村　自治労の総合研究所は、自治研集会の先にね。

檜槇　そっから始まりました。

岡村　そっから始まってますよね。それで最後に、ついこの間、辻山君が亡くなりましたけど、彼も横山さんの研究室で。

檜槇　一周忌の、出ました、私も。

岡村　すいません。ほとんど横浜の自治労とか、そういった所から声掛けていたから、今、おっしゃられたような感想、受けるんじゃないかと思いますけども、確かにそういう面はあると思います。2番目が。

檜槇　2番目は、世論調査やっていただいたと。

岡村　社会学じゃなくて。

檜槇　聞いたことですよね。社会学の先生たちは多かったのに、政治学関係は貴重だったんじゃないかなというふうに思って、そこをお尋ねしたいと思った。

岡村　そうですか。その当時の調査方法ですね。

檜槇　その当時のことです。

岡村　まだ20代の中頃で、まさに元気な時でした。たまたま私、大学時代にクラブで民俗学の調査みたいなことをやっていて、聞き取り調査というのも、あまり苦にしない方だったんです。先生がやっている調査というのも、いわゆる社会学的な調査で方法も同じです。質問づくりを自前で、政治学だから天皇制から何から政治に関することや、そこの現場でいま起こっている問題などがまざっていて、いろんなことを聞いちゃうわけなんです。けども、調査の回数を重ねるにつれ、整理して行く段階で選挙の事前調査的なものに簡略化し、その後の活動に結び付いた実践的な方向へと移って行きました。新聞社の予測調査などの受託も受けました。簡便なやり方を取るっていう方法を開発したもんですから、そういう点では、気軽に調査に入れたということができます。それにしても、自分の所で研究室、持って、電気代から給料から何から、役所が出してくれるなんて、こんなありがたいっていうか、素晴らしいことはないときだったです。ただ、今は、そういう風潮はなくなりましたね。

檜槇　そうですね。一番大事なの、行政の病理とおっしゃいましたが、実際、病理みたいなものを、内部でちゃんとチェックして、やっていける体制だと思うので、恐らく今後も、岡村さんや松本得三さんたちがおやりになってきたような調査機能を軸とした政策評価っていいますか、政策的なアンチテーゼといったものを出し続けるような形でなければいけな

いんだろうというですね。それが必ずしもまだ十分じゃないと、日本の自治体がですね。その辺をこちらに感じるんですが、確かに相模原市長選挙に出されてしまったという、先ほどの岡村さんの観点から、なるほどねっていうふうに思ったんですけれども、でも、そういったものを残していかないと、つくっていかないといけないんだなというふうに思います。その辺は、どうですかね。

岡村　それはありますね。ただ、そういうのをやるときに、役所の職員が休暇取って、調査員になって、2 回、選挙の前と選挙の投票直前とやるくらいなエネルギーは、当時の横浜市役所の職員は持ってたわけですよね。持ってたけども、なんか少しずついなくなって、それから、ずるずると後退しちゃったわけですね。

檜槇　選挙の倫理の問題は別にあるにしても、今、おっしゃるような意味で、自治体職員っていうのは、そんなふうな、ある種、行動ができるような文化がつくられていなきゃいけないのに、国家公務員制度の小ぶりなものをつくるみたいなものばかりをやってきたっていうのが、今、要するに機能的に行政がうまくいかなくなってきてるっていうことじゃないでしょうかね。

岡村　それはありますね。そうだと思いますね、その辺はね。

檜槇　すいません、お話を聞いてて、どうしても話が次にいく前にお尋ねしときたいと思って、途中で割り込みました。ありがとうございました。田口さん、いいですよ。

田口　はい。岡村さんの関わりのある時系列な区切りを。都市研はそういうことだったですけど、文書課に移ったのは昭和 52 年だとして、ただし、移って、ある時期たってから、開港資料館の話を議会にしたっていうことですよね。

岡村　そう。だけど、ほんの 1、2 カ月よ。

田口　1、2 カ月。

岡村　私の動きは速いからさ。判断が速いっていうか、やってらんないよな。はんこのために人間が付いてるなんてのは、あほらしいからさ。そうすると、新しいモノを創り出す理念を磨き上げちゃわなきゃいけないわけだよ。要するに、回りを説得。それは田村さん、よく言ったでしょ。まず、やるんだったら、人を説得するような論理つくって。そして。

田口　田村さんと一緒におやりになったのは、だから、そういう意味で言うと、開港資料館

の案件でということですね。

岡村　そう。それで開港資料館で実現する段階で、田村さんの時代が、市長が代わった、それがあったもんだから。ずっとできなかったけども、だけど最初のときに、話、聞きましたからね。ちょっと遊びに来ないかって言われて、向こうに行ったときに、あそこ、やっぱり、一等地なんだと。たとえ小粒であろうとも、ぴりっと辛い山椒みたいなものにしなきゃ駄目なんだけどって。そうなると、さっき言った広がりっていうのかな、都市研のときに集まったいろんな人がいたわけでしょ、全国に。これは、この人でやらなきゃとか、これはどうかね。だから、あまりピンがずれなかったですね。最初に東海林さんたちと月に 1 回ずつ出て、方面分けて、資料収集っていうのかな、資料調査をやったけども、一回目に行ったのは、群馬県の田島家っていう現在世界遺産の構成家屋だもんな。そこのうちを訪ねて、そこの蔵の整理から始めた。そういう点では、いい先生にたくさん恵まれたっていうことはありますよ。こういうときは、その先生に相談すると、その先生が、またこっちに紹介してくれるっていうね。

田口　その人脈っていうのは、どちらかというと都市研時代に。

岡村　都市研時代に。

田口　都市研でメインにやってたことは、田村さんたちがやってるものに、どうフィードバックされてるんですか。都市研でいくつかの調査があるじゃないですか。出稼ぎ問題もやったし、木賃アパート調査もやった。職員も、岩崎さんもそうだけど、内藤さんとか、いろんな人が関わっていますね、調査結果を見ると。ああいうものは、田村部隊にフィードバックされたのですか。

岡村　そんなことはなかったね。つくるまでに、みんな力出し切っちゃうからね。書いたらば、それ以上に。ある程度、固まっている仕事でなければ書けないよな。書けるとき、書いたときっていうのは、それを進めるため。だから、この文書課っていうか「開港資料館の基本的な方向」。これなんか、完全に市長が替わっても仕事を後戻りさせないで、最初の理念と計画とおり、つくらせて、そして、その次、どう展開するかという方針も入れて書いたから、「調査季報」などそういう使い方もできるよね。それが、だって全部、役所の内外に出ちゃうんだから。だから、こっちは出すことによって、かなり安心するところがあるし、それから、よそに提示するときも、まとめてあって楽だしね。

田口　開港資料館のお話は、具体的な点で整理しやすい気がします。

岡村　都市研の？

田口　企画調整室の田村部隊がやっていたプロジェクト、コントロール、アーバンデザインに対して、都市研でおやりになってるいろんな活動が、なんか接点があったのか、という疑問があります。

岡村　全くないな。

田口　そういう気しますよね。

岡村　一回だけあった。『私の横浜』っていう、飛鳥田市政最後の白書を出したとき。それが田村さんが企画調整局長になって初めての、「企画調整局長、田村明」としてあとがきに入る本だった。編集発行が「横浜市企画調整局都市科学研究室」となっている。いい文章で、すごく。お母さんの、三国峠を越えて、横浜へ勉強に来たっていう。あれくらいだな。もう一つ、共通してるところは、両方とも字書くの速いけど、読みにくいっていうの、うんと。だけど田村さんと私とは非常に相性が良くて、田村さんの原稿、間違いなく起こせるし、向こうも私の汚い字を読めるしっていうんでね。両方でふざけ合って、あんた、字うまいじゃないのよ、なんてやってたけど。

田口　都市科学研究室がいろんな研究会や自主研究会をやったり、そういう調査研究をやるときに、いろんな人が業務で参加してるんですか。

岡村　業務じゃない。研究会を自主研究会みたいにつくらせちゃって、それで、その人たちが中心になって、自由に運営するものだから。こっちが枠をつくって、どうのこうのじゃなくて、自主的にできてきた。極端に言えば、「調査季報」の特集や「独自調査」まで企画する。

田口　調査まで。

岡村　そう。

田口　だから当時、企画調整局にいた若者たちにとっては、使いやすい場所だったんですかね、都市研っていうのはね。

岡村　そうだね、そういうのは。別にあそこだけじゃなくて、他の部署の人、特に広報だとか、それと、各社の新聞記者たちね。また、「朝日」の全国版の編集員クラスの人たちがち

ょこちょこ来てたし、世論調査の室長と一緒に質問つくりをやって、それで、東京ではこういうデータが出てるけど、横浜ではどうだとかっていう。

田口　いろんな外部の人たちも、都市研には、だいぶ、出入りしている？

岡村　してた。その他に、まだいたからね。私だって、誰れだ、この人っていう嘱託で週に一回見える長野大学の前野良さんとか、1年間だけやって来る人だとかさ。

田口　都市研に？

岡村　そう。フランスのグルノーブルだとか、あの辺の調査に行ったんだけども。行ったって私がじゃないよ。飛鳥田さんなんかがいるとき、向こうの研究をしてた学者を1年間、雇って。それで向こうへ行って、コーディネートから何からして、報告書も書いて、「グルノーブルの市政」とか、そういう「調査資料」を出す。そういうこともやった。しかし、それはだけど、予算使ったから出すっていうやつであって、それを使って、広げて新たな展開をはかるっていうのは考えてないよな。

田口　お仕事として、存在証明みたいな。

岡村　そう。

田口　もう一つ、横山悠さんなんか、研究会やってたのは。

岡村　福祉の関係の。

田口　イタリア共産党の歴史をやってた。

岡村　ロシア語の『プラウダ』を読んでるグループもあったな。企画調整局に高橋さんって。

田口　敏美さんね。

岡村　敏美さんか。それから、広報課かなんかにいた女性と松本さんと3人で、『プラウダ』読んでたね。

田口　そうなんですか。すごい。

岡村　松本さん、抑留されてたからね。

田口　シベリアに抑留されてましたね。

岡村　だから。高橋さんとその女性は、向こうへ行きたいもんだからさ。

田口　留学しましたよね、高橋さんね。

岡村　だから、そんなのに顔出すとか、そんなことを。

田口　そういう、割と自由な研究っていうか、学びの場が、都市科学研究室には、外部に、いろんな人もいて存在した。

岡村　そうなんだよね。だから、サロンだね。

田口　サロンね。

岡村　全くサロン。それから、助川さんなんて、5階の対策局長だったけども、遊びに来て、都市研で、雑念、むしろ払っていくとかね。だから、本音をある程度、しゃべることが多かったよね。昼間だけじゃ足りなくなるから、あとは夜の部。きょう、夕方、一緒に行こうかと。

田口　その研究会っていうのは夜ですか。

岡村　夜です。昼間のときもある。昼間のときは、だから本人の所属長宛てに、都市科学研究室から依頼状を出すけどね。何月から何月までの何曜日は、この研究会に出席してもらう。だから、自由に出やすくするっていうか。その代わり、やるのは、その人たちが自分たちで責任持ってやるって。

田口　佐々木寛さんなんか、楽しい時代だと言ってましたね。

岡村　そうだね。その延長で一緒に旅行に行ったりしたからね。だから、ごく普通の人よ。普通の動き。だけども、真面目に対応できる人だったね。

田口　佐々木さん？

岡村　佐々木さんじゃなくて、松本さんって。

田口　松本さんね。面白いですよね。

岡村　だから、都市研は役所の番外地ですよ、やっぱり。

田口　番外地ね。面白いですね。

岡村　その番外地を持てたっていうのかな。それは、飛鳥田さんがうんぬんっていうよりも、社会全体、そういう時代だったっていうのもあるんじゃないかな。

田口　そのときに、どちらかというと、松本さんを慕って人が集まったのか、都市科学研究室という番外地の自由さを求めて、人が集まったのか。

岡村　それは番外地ですよ。

田口　番外地。

岡村　あそこだったら、別に本音でしゃべってても、後で、どうのこうの言われたりとか、そういうこともないしね。

田口　その当時、岡村さんから見てて、田村さんは、互いに仕事がめちゃくちゃ忙しいから、あれかもしんないけれど、田村さんを慕って、若者たちが仕事をちょっと離れた、まさに、今いう番外地、企画調整室本体の中にはあったんですか。

岡村　それは、向こうの部屋、あまり行ったことないから。ビルが違ったじゃん。

田口　違いますね。

岡村　ただ、仕事の中であったんじゃないの。でも、仕事では。ほとんど向こうの部屋へ行く必要がなかったからね、こっちもね。たまたま行ったら、君（田口俊夫）がいたのよ。見たことない人だなと思ってさ。そんなに、ちょいちょい向こうに行かないもんだからさ。君、いま何やってんのって聞いて。そんときは、まだ役所に入ってなかったんだと思う。

田口　（英国留学でアーバンデザインを学んでから各地の役所を見学していた）見学に来たんですね。

岡村　そういうふうに言って、それも面白いかもしんないねと思って。

田口　1977 年ぐらいかな。

岡村　イギリスのどこなの。

田口　マンチェスター。

岡村　に行ってきて、帰ってきたんで、今度、できれば。

田口　入りたいです、と申し上げた。

岡村　そうなのっつってさ。

田口　そのときは、横浜も面白いかなとは思うんですけど、他の都市も見てから考えたい。今、勉強してるんですと言いました。

岡村　そうだと思う。それで覚えてたんだ。

田口　岩崎さんが、僕が見学に行ったら、すげえ、ごっつい奴が来たなとか言っていただいて、ありがとうございますという気分でした。しかし田村さんには、当時、当然お仕事してる感じがありました。田村さんが左遷そして辞任してから、僕らも職員の自主研究会「まち研」をやってました。僕らふうに言うと番外地なんだけど、田村さんがまさに現役でやってた 10 年間の中に、田村さんご自身が番外地的なものを持ってなかったんじゃないかなという感じがしています。お仕事はゴリゴリ、たくさんやってたと思うし、若者たちはその中で学んでたのでしょうか。どこで人が育ったのかなっていうのが、我々が不思議に思ってたところなんです。

岡村　だけど、随分、育ったよね。

田口　えらくね。

岡村　だって、石阪丈一（元企画調整局調整課職員で現職の町田市長）みたいのだって、いるんだもんな。あいつはハード系じゃないでしょ。

田口　物をよく分かってます。

岡村　そうだよね。もう5期目だもんね。

田口　この研究会も一緒に、何回か勉強に加わっていただいたこともあります。

岡村　だから、そういう点では、企画調整局で育ったんだと思うよ。

田口　そうなんですね。

岡村　でも、考えてみると、そういう人もイレギュラーか。

田口　私の偏見でいうと、私は政変になってから市に入ってますので、あのとき見てても、この人は、ここで許してもらえるタイプの、信念を持って企画調整をやってるんじゃなくて、たまたまいるんだなっていうような人と、この人は信念ありまくりの人と、ほぼ明快に分かれるなと思いました。

岡村　そうだろうね。ゴリさんみたいな人とね。

田口　それあるね。

岡村　そうでない人、いるよね。若竹さんが、うまく対応されたほうなんじゃない？　今度、新しく出来た企画調整という組織に。

田口　そうですよね。

岡村　あそこを。

田口　若竹さんが。

岡村　うん。信念じゃなくて、影響を受けたうんぬんというよりも、自分の生き方として使っちゃってねっていう感じがするね。

田口　する。

岡村　だから、田村さんがいなくても、もともとああいう個性の人なんだな、きっと。

田口　若竹さんは、そうかもしれませんね。

岡村　だから、若竹さんと、もう一人、技術系じゃない田口さんという市民局に移って、区民会議を立ち上げた人。

田口　田口隆さん。割と背が高くて。親戚じゃないけど。

岡村　いたよね。あの人と岩崎さんと 3 人が同年齢の 35 だったんだよ。それで、岩崎さんを副主幹にさせるのに、2 人は一緒に若くして課長になれちゃったんだ。

田口　若竹さんと田口さんとがですか。

岡村　田口さんも。

田口　そして、岩崎さん。

岡村　岩崎さんは、それで。岩崎さんを課長級にならせるために、本来ない特進の 35 で。それで、企画に行くと出世が早くなるぞというのを他の職員に見せしめた。それからだんだん、ちょっとあそこへ付き合ってもいいじゃないかって、普通の職員をくすぐったわけだな。そうした職場に何年までいたんだ、私は。2003 年まで役人やってたんだな。その間に県と鎌倉と、二カ所の自治体を楽しんだ。その後のことは、仕事の後始末と、もっぱら遊びですから。

田口　ありがとうございます。きょうのお話と頂戴した資料も整理して、それでどういうふうに進めるか。だから、企画調整と開港資料館のお話は、極めて重要で、都市研と開港資料館がどういうふうに、企画調整機能を発揮しながら進んでいったのか。企画調整番外地論でもいいんだけど、それをどうふうな形で岡村さんたちのお仕事を記録すればいいのかが課題ですね。

青木　行政学とかとは方向が少し違うかと思うんですけれども、今、お話、伺ってて。ここら辺のその後の経歴と職歴等を拝見させていただいて、空白地帯というか、そういう所に、すごく身を置いてらっしゃった方なんじゃないかなという印象がありまして。今、おっしゃった都市科学研究室もそうですし、その後に文化行政じゃないですか。文化行政はある意味で、長らく、空白地帯だったんですよね。

岡村　そう。権力からは遠く、まだ固まってない分野だったので、文化行政にはカオスな部分も多く、具体的に手を付けると多様な市民との出会いがあって楽しかった。

青木　空白だから、自由にできるけれども、それ故、それから何を立ち上げるかっていうのは、すごく難しいところにいた。

岡村　面白い、それが第一だと。面白けりゃ、知恵も出ると。それがモチベーションにないとさ。

青木　そうです。私は面白いっていう、もちろん、田村さんとの関係や松本さんとの関係って重要なんですけど、個人的には、岡村さんの行政に対する見方だとかを、もっと深く聞いてみたいなというふうに思いました。

岡村　要するに距離感だよね。役所と、どういう距離をとるか。

田口　それがいいですね。

岡村　もともと自分で役人と先生と、それから金融関係。それらの職業に就くことはないだろうと、性格的に考えても。ところが、不思議なことだよな。今、考えてみりゃあさ、役人、それから、その後、神大。だけど先生、嫌いなわけだよな。先生になりたいわけじゃないんだから。だから、つまり、田村さんもそうなんだけど、役人を変える役人っていうのがいてもいいんじゃないかというふうに。神奈川大学に来たとき、結局都市自治論が、テーマになってくる。田村さんも、しがない大学の先生なんてのになったけど、本当はやっぱり現場にいたかったんだな。それは、ありありとしてたね。でも、それがあるが故に、自治体学っていうのと、それから自分が関わる範囲内で全国行脚するというね。だから、変わったんだろうね。あそこで田村さんが市長になったらっていうのもあるけども、そうじゃない、もう少し市長も、うまい田村さんへの接し方したらば、彼は嫌だって言ってなかったと思うね、田村さん。残っても。

田口　細郷さん？

岡村　うん。ただ、細郷さんも横浜駅東口開発公社時代に、はじかれたりなんかしちゃったから、向こうが嫌な感じを持つのはあるだろうけども。

田口　田村さんが自分で書いた小説があるの、知ってます？

岡村　うん。「田村明の闘い」でしょ。

田口　あれ（注：非公開の別冊小説）の中で言ってますよね。総務課長が細郷さんから来た協力申入れを勝手に葬ったとか。

岡村　それは分からないけどね。

田口　だから、細郷さんにしてみれば、恭順の意を示すならば使ってあげてもいいと思ってたんでしょう。

岡村　そうだと思うよ。だけど、そんときは技監兼都市科学研究室長でしょ。だから、ろくでもない。

田口　そうならば、ちゃんと企画調整局長です、自分の言うこと聞くならば。

岡村　そう。

田口　細郷さんの言うことは聞きませんっていう雰囲気になっちゃったんでしょう。

岡村　なっちゃったっていうか、周りが忖度しちゃったんじゃないの。

田口　しまくっちゃった。

岡村　ただ、一つ問題なのは、同じなんだよ。この間の五島君たちと話したことと。同じなんだっていうのは、結局、質問の論点も。

田口　考えてることは同じような。

岡村　そうなっちゃうんだな。だから、なんか違う。これは資料館とくっつけたから、まとめようと思えば、まとめられるかもしんないけども、都市研だけだったら、ちょっとまとまんないねっていうことを、この前、向こうのほうでは話した。

田口　そうかもしれないですね。

岡村　だって、役所の番外地といったって、そんな時代があったんですかなんて言って、終わりじゃない。

田口　以上、終わりでね。

岡村　うん。

田口　私、どちらかというと、都市研の興味はあるけども、開港資料館のほうに興味あるんですね。

岡村　そうでしょう。

田口　開港資料館の話をきっちりまとめたい。

青木　そうですね。

岡村　その裏に、ちらちらと入れたほうが。

田口　番外地、入れる。

岡村　うん。身体で例えれば、都市研は役所の盲腸みたいなもので、普段はおとなしくぶらさがっているだけ。役所にとって痛くも痒くもないが、炎症を起こすと腹部の激痛や発熱で苦しむ。

青木　番外地も、でも開港資料館も、岡村さんの中で一つ、つながってる感じがありますね。

岡村　それはそうだよね。

田口　きょうは出てきてないけれど、岡村さんより、全然、後の文書課にいた職員で、今、研究者になってる人がいるのですけど、彼は、開港資料館っていうのは文書館だったのでないかと言っています。

岡村　文書館。

田口　公文書館としての性格をなぜ放棄してしまったのかということに、えらく関心があるみたいです。

岡村　なるほどね。公文書。だから、名前はアーカイブスなんだよね。だけども 3 分割にな

っちゃったでしょ。それで、公文書館という役割を言う人がいなくなっちゃったんだろうな。

田口　3 分割って、どう。

岡村　だって、その裏にある。裏、見てみて。年表の裏。

田口　都市発展記念館と歴史博物館。

岡村　そう。

田口　歴博も入れてか。

岡村　それだから、公文書館、それら三つをあわせて公文書館として機能を実現するっていう考えがなくなっちゃったんでしょ。

田口　なくなっちゃって、市史資料室も中ぶらりんになってる。

岡村　そう。だから、三館ばらばらな運営になっちゃって、それこそ企画調整されてないんだよ。

田口　使われてないですね。だから、市史資料室もえらく使い勝手が悪い。

岡村　悪い。そうでしょ。

田口　いろんな資料、寄贈されてても、えらく使い勝手が悪い。でも、みんな、ちゃんとしっかり保管してるからいいと言えばいいんだけど。

岡村　そうだよね。もともと資料館設立構想のときに、三館構想で、昭和期の資料は、私としては大倉山がいいと思ったんだよね。

田口　言われてましたよね。

岡村　それで、あとは公文書は増えるんだから、それは海から離れた広い所で、地下に入れて、上は、それこそ広場で使うね。そして、三館が一貫性持って、どこで請求しても資料は取れるというね。それは文書課、本来だったら、文書管理するという部署がイメージ持たなきゃ駄目だよな。

田口　本当です。

岡村　そういう考え方がわかないんだよ。

田口　よくも、ちょつと公開するだけ、あとは、どんどん捨てまくるという、これが文書管理なのか。文書廃棄係になってる。

岡村　そう。

田口　では今後、そういう組み立てを考えながら、ご相談していきましょう。

青木　はい。

岡村　だから、今、あなた、おっしゃられてたように、開港資料館の、例えば委員の人選とか、そういうのも含めて、それなりのドラマがあるから、面白いですよ。

青木　そうですね。ぜひ、その辺を伺えたら。

岡村　そうだよね。

田口　ああいう堀さんみたいな人材を採って、活躍させるっていうことも含め、面白いですよね。

岡村　それで、私は3年間分の予算書を書いて来た。それで3年に渡り、予算の担当者にはちゃんと約束を守らせて、全体の資料を購入した。だから1年だけ、余分に残ってやって来てる。

田口　しっかりまとめていきたいと思います。

（了）